

日本動物分類学会声明

海産動物分類学の教育研究拠点として全国各地の臨海実験所の発展を

2008年11月29日

日本動物分類学会 会長 西川輝昭

動物界を36門に分ける通説にしたがうと、35門は海に生息している。また、その半数近くは海にだけ生息する動物門である。ことほどさように、海域には多種多様な動物が生活しているが、それを発見し、記載・命名し、整理・体系化する学問である分類学は、陸域とくらべると、一般に遅れている。新種があいついで発見される一方で、人間の視野に入ることなく文字通り「闇から闇」に葬られる動物種も少なくないであろう。生物多様性保全の学問的基盤としての分類学、とりわけ海産動物分類学の振興が叫ばれる所以である。海産動物が秘めている可能性は、2008年ノーベル化学賞を受賞された下村脩博士の研究成果がそこからもたらされたこと一つをとっても、明らかである。

このような背景のもと、臨海実験所は文字通りフィールドたる海に臨み、動物分類学の重要な拠点となってきた。臨海実験所は、十分なフィールドワークを可能とする船舶や採集器具をはじめ、継続的な生態観察を可能にするフィールド、天然海水がふんだんに使える実験水槽、生きた状態で形態情報を取り出すための設備など、分類学をすすめるのに不可欠な研究条件を提供してきた。南北に長く、熱帯から亜寒帯まで多様な環境条件をもつ日本列島において、臨海実験所が各地に設置されていることの恩恵は言うまでもない。

こうした条件に助けられて、日本においても、動物学の草創期以来、全国各地で、臨海実験所の専任スタッフや利用者による海産動物の分類学的研究の成果が、膨大に積上げられてきた。どこにどんな動物が生息するか（動物相）を解明したこの成果は、応用科学を含むさまざまな学問分野の基礎的情報として活用され、その発展に寄与してきた。たとえば、新たな研究材料の開拓、比較研究への新たな枠組みの提供、絶滅危惧動物や外来種への対応などが挙げられる。しかしながら、よく知られているように、動物相解明のこれまでの成果によってさえはるかに汲みつくせないのが、海域における生物多様性である。分類学の振興が一層求められる。

本学会は、全国各地の臨海実験所がそれぞれの特徴を生かして発展し、生物学ないし自然史学に関する学校教育・社会教育が進むこと、そして、フィールドを生かした多彩な研究が展開されることを切望する。動物界の多様性に関する幅広い知識をもつ動物分類学研究者こそが、その中心的な役割を果せることを確信している。臨海実験所のこのような発展に向けて、一層の環境整備を各方面に強く要望するものである。